

「比較日本学研究センター研究年報」の創刊によせて

お茶の水女子大学長

本 田 和 子

「比較日本学研究センター」の設立と、成果公表のための年報の創刊に際して、心から敬意を表したい。この営みは、単に本学を起点とする国際的ネットワークの構築であることを越えて、わが国学術の現動向に対して、批判と反省の一矢を投じる試みとしても機能し得ると思うからである。学術の方向が効率と効用に傾き過ぎるとき、研究することの喜びは片隅に追われ、研究者たちもその快樂から遠ざけられる。そのゆえに、この時期に出発する日本研究の営みは、ささやかながら、研究の喜びを共有する者たち相互の連帯を強化し、学術の健やかな歩みを保持し続ける役割をも担うことになるろう。

ところで、日本研究の国際化とその重要性が叫ばれて久しい。にもかかわらず、かつては文系学問の主座にあった日本史や日本文学が、その位置を失い世界に通用不能な無用の学とされ兼ねない危機に直面している。危機を招きよせた原因は種々考えられるが、しかし、日本研究当事者の側も一半の責任を負わねばならないのではないか。なぜなら、成果を共有可能な表現で発信する努力が、果たして十分であったか否かが反省されねばならないからである。

日本研究の国際的発信の手段としては、大別して二つの方向が考えられよう。一つは、国際的共用語たる英語によって成果を発信すること、他の一つは、日本語による日本研究の意義を重んじ日本語表現を保持した上で、それを国外に広めるための方策を講じること、しかし、そのいずれに関してもこれまで十分な努力が払われてきたのだろうか。とすれば、本研究センターの活動目標に、研究内容の国際化と同時に、表現媒体と発信手法の国際化をも位置づけておく必要がある。これら重責を担って船出する年報の航路安かれと祈り、寄港する先々での豊かな交流を願って、饞としよう。創刊、おめでとうございました。